

学 位 論 文 要 旨

氏 名 片桐 亮 (亜希)

題 目 ジェンダー／セクシュアリティをくなのる>こととくいきる>ことの意味
—多様な性のくかたり>を媒介とした心理臨床学的考察—

学位論文要旨 (和文2,000字又は英文1,000語程度)

本研究は、身体的なものであれ社会的なものであれ、なんらかの性のありようをくなのる>当事者個人々の体験に焦点を当て、語りに耳を傾けることでその主観的な内面世界としてのくいきる>ことの解明を目指した。最後にその蓄積としての研究者自身の成果について検討することで、当事者一人一人がそれぞれに固有な性をいかに生き、かつそれぞれに固有な性を生きる心理臨床の実践者としていかに支えるか、そして両者の間でいかに相互理解を得るかについて、探索的に考察することを目的とした。

あるジェンダー／セクシュアリティを自認しくなのる>こと、そしてそれを抱えもってくいきる>ことの意味は決して一義的でなく、むしろ多義的で曖昧さを含むものである。ジェンダー／セクシュアリティの曖昧さを受け止め、とどまり、抱えもつことは、セクシュアル・マイノリティ当事者の自己理解のためにも、またその周囲の人物や支援者の他者理解のためにも役立つのではないかと、筆者は考えた。

全5章で構成される。

第1章では、先行研究のレビューと課題の指摘を行いつつ、ジェンダー／セクシュアリティにまつわる諸問題と概念を再検討し、本研究の目的とするものを述べた。その際には、研究者自身のくかたり>として、自らのポジショニングについても述べられる。

第2章(研究Ⅰ)では、『三人吉三廓初買』という歌舞伎のくかたり>のなかから、「お嬢吉三」という「女装の盗賊」をくなのる>人物を取り上げ、お嬢吉三自身のジェンダー・アイデンティティが解体と再生とを繰り返す(脱構築する)様相について紹介した。

第3章(研究Ⅱ)では、ある「Xジェンダー」をくなのる>当事者Aの語りを取り上げ、Aにとっての「X」の意味、そして「X」をくいきる>ことの意味について考察した。「Xジェンダー」は、従来の「男」とも「女」とも異なる、一人一人に固有でオルタナティブなジェンダーを生きる者を指した表現とされている。聴き手(筆者)と語り手(A)とのやりとりのなかで、「X」の内包する曖昧さと向き合いながら、その意味を模索したインタビュー事例である。

第4章（研究Ⅲ）では、ある「バイセクシュアル」「ポリアモリー」をくなのり＞当事者Bの語りを取り上げた。Bは、他者に対しては「バイセクシュアル」「ポリアモリー」という二つのセクシュアリティをくなのり＞つつも、その実くなのり＞の困難なセクシュアリティをくいきる＞当事者である。聴き手（筆者）は、一言で表現することのできないセクシュアリティをCがくいきる＞意味について、背景にある家族関係と関連づけながら解釈した。

第5章では、総合考察として、研究Ⅰ～Ⅲの論文そのものを研究者—対象者共同のテキストとして批判的に考察し、研究者自身のジェンダー／セクシュアリティがどのようにテキストに影響を及ぼしてきたかを検討した。それと同時に、ジェンダー／セクシュアリティをくなのり＞ことの意味について、三つの研究から得られた知見を提示した。

研究Ⅰ～Ⅲは、時系列順に並んでおり、細かい表記を除いては、執筆当時の文章を変えることなく掲載している。すべての研究の当事者である「私」の、自己の「性」あるいは他者の「性」に対する構えの変化を追うこともできる。

本研究の独自性は、ジェンダー／セクシュアリティにまつわるあらゆるくなのり＞を客観的なものとして一般化せず、語り手一人一人の主観的な物語世界を理解するための素材として個別化する方向性をとる点にある。たとえば「Xジェンダー」も「性同一性障害」も、本研究においてはそれをくなのり＞語り手自身の、あくまで主観的な意味が最重要視され、客観的な意味は二次的なものとして扱われる。ここには、人間の性が多様で、かつ一人一人に個性的であるという前提がある。この個別理解の視点は、来談者の個人的で主観的な諸問題を探る営みとしての心理臨床学実践の方向性とも通底する。

なお、本研究には、筆者による一人称の語りが何度か登場する。これは、心理臨床学研究における当事者性について検討するためのものである。